

平成 25 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

腹部指圧による成人女性の自律神経反応および排便状況の変化に及ぼす影響

学位の種類: 修士 (看護学)

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号: 12894603

氏名: 岩田明日香

(指導教員名: 河原加代子 教授)

注: 1 ページあたり 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1~2 枚 (A4 版) 程度とする。

【目的】便秘は慢性化・長期化することで病的状態をひきおこす可能性があり、看護においては頻度の高い健康問題である。便秘ケアに関する指圧の研究は主観的評価が多く、生理的指標を用いての評価や腹部全体への指圧の効果を検証した研究は少ない。本研究の目的は、腹部指圧が自律神経活動に及ぼす変化を心拍変動解析を用いて評価し、さらに継続的な腹部自己指圧による排便状況と自覚症状の変化について明らかにすることである。

【方法】研究デザインは仮説検証型準実験研究とした。

- 1) 対象者は都内 A 大学の学生を主とした健康な成人女性 15 名 (平均 28.1 歳) であった。
- 2) データ収集期間は 2013 年 8 月 12 日~11 月 6 日に実施した。
- 3) 仮説は①腹部指圧により副交感神経活動が有意に上昇する②腹部指圧を継続することで日本語版便秘評価尺度 (CAS) の合計点が有意に低下する③腹部指圧により快感情が有意に上昇するとし、5 分間臥位での腹部指圧プロトコルを用い 2 週間実施した。
- 4) データ収集方法は、基本属性に関する質問 18 項目、生理的指標は血圧、心拍数、心拍変動解析による自律神経活動の測定、主観的評価は指圧前後での快-不快感情に関する VAS、身体的症状は CAS の 8 項目と便秘による随伴症状に関する 13 項目を用い評価した。
- 5) データ分析方法は、介入前後での比較を t 検定または反復測定一元配置分散分析あるいは Friedman 検定を行い、有意差を認めた場合はさらに多重比較法を行った。有意水準 5% 以下とした。

【結果】指圧介入直後から、血圧、心拍数ともに有意な低下を示し (それぞれ $p < .05$, $p < .01$)、自律神経活動の指標の HF は上昇し、LF/HF、LF ν は低値を認めた。CAS 得点および便秘による随伴症状得点は、介入 2 週間後には有意な低下を示した (それぞれ $p < .05$, $p < .01$)。また指圧前後での VAS は有意な上昇を示した ($p < .01$)。以上より仮説①~③が検証された。さらに全被験者が 2 週間の腹部自己指圧を継続することができていた。

【考察】腹部への指圧は心臓自律神経活動に変化を及ぼし副交感神経活動を高め、リラックス状態をもたらすと推察できた。さらに継続的な指圧介入により、自律神経バランスの調整と腹部周囲の筋緊張が緩和され、便秘症状や随伴症状の改善が図れたと考えられる。これより腹部指圧は循環動態の変動を指標にすることで、自律神経バランスの調和をはかることができる看護援助の 1 つとして活用でき、全身的なアセスメントにもつなげることができると考える。

【結論】5 分間の腹部指圧により副交感神経活動が高まり、便秘症状の改善のみならず全身的な症状の改善も図れることが示され、看護場面での応用可能性や継続的なセルフケアとしてもその有用性が示唆された。